

インタードッグ

疾患名	用法用量	基本的な使用方法、目的	備考
アトピー性皮膚炎	①週3回×4週間 ②週2回×4週間 ③週1回×8週間 ④その他(症状に合わせて)	ステロイド、抗ヒスタミン剤、抗真菌剤、抗生剤等を併用する事により、ADの合併症を予防する。 重症であれば投与期間が長くなる可能性がある。また改善してきた時は、症状に合わせて徐々に投与間隔を伸ばしていく。	AD発症初期からインタードッグ治療を開始すれば、その後のコントロールがスムーズになる可能性がある。体質改善の可能性もあるので、長期にわたり再発を予防できる可能性がある。
脂漏症	①週1回×8週間 ②その他(症状に合わせて)	抗生剤、薬用シャンプー等による治療を実施しながら、身体の免疫バランスを整えるためにインタードッグを使用。	脂漏症の治療にインタードッグを追加することにより、治りが早く、再発を予防できる可能性がある。
上皮向性リンパ腫	①週3回 (状態が良くなれば、徐々に投与間隔を空けていく) ②週1回 (状態が良くなれば、徐々に投与間隔を空けていく) ③その他(症状に合わせて)	インタードッグによって完治させることは難しい。QOLの改善が目的となり、強い痒み、脱毛、びらん等を改善する。	腫瘍に対しては ①手術 ②抗癌剤 ③放射線治療 が主体ではある。 しかし、 ①外科処置で取りきれなかった ②高齢なので手術が難しい ③抗癌剤が効かない ④抗癌剤によって副作用が出た といった症例に対しては、サプリメント等を使うより、人医療でも使われているIFN製剤を使用した方がより効果が得られる可能性がある。 また、オーソドックスな治療を実施した後に、再発予防、転移予防等を目的としてIFNを使用することも可能。
悪性黒色腫		インタードッグによって完治させた例もあるが、インタードッグ単独によって完治させることは難しい。QOLの改善が目的となり、腫瘍の縮小、転移防止等を治療の主とする。 また基本的な使用方法としては、 ①手術を実施したが取りきれなかった場合 ②手術をした後の再発予防 ③抗癌剤によって副作用が発生し、抗癌剤投与の継続が難しい場合 ④抗癌剤が効かなかった場合	
肥満細胞腫		インタードッグによって完治させた例もあるが、基本的な使用方法としては、 ①手術を実施したが取りきれなかった場合 ②手術をした後の再発予防 ③抗癌剤によって副作用が発生し、抗癌剤投与の継続が難しい場合 ④抗癌剤が効かなかった場合	
肝癌		インタードッグによって完治させることは難しい。QOLの改善が目的となり、腫瘍の縮小、腫瘍の拡大防止、転移防止等を治療の主とする。	
第三眼瞼腺癌		基本的な使用目的としては、手術をした後の再発予防。	
肛門嚢アポクリン腺癌		基本的な使用目的としては、手術をした後の再発予防、転移予防が主となる。	